

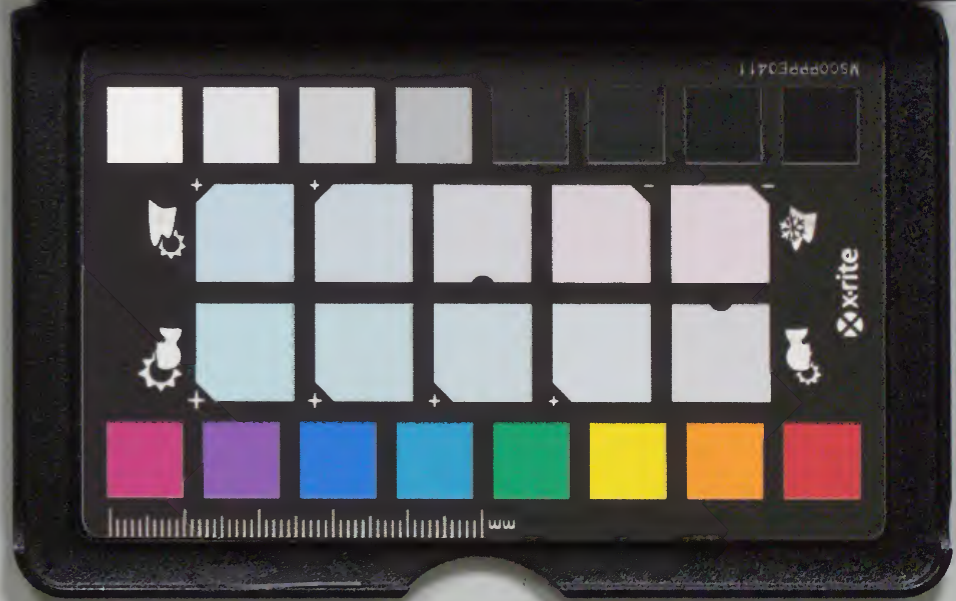
常山紀談

二十五

				和書門
一	二	三	四	
七	九	三	二	
冊	函	號	類	

庫文閣内			
一		四	和
七		三	書
函	一	三	
	冊	〇	
		一	類
八		號	
架			

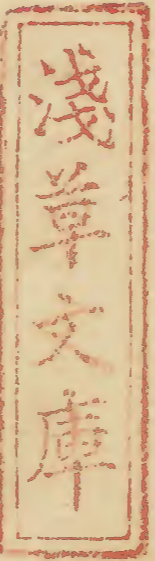
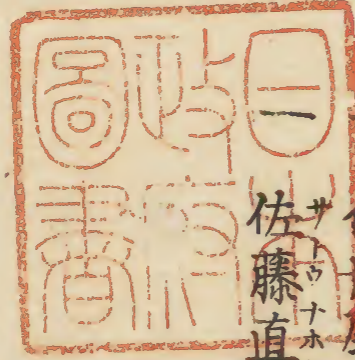
内閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 (12)
函號	170 49



常山紀談

常山紀談卷之二十五目次

- 一 石井兄弟報讐の事イシノイ キヤウダイ ハウシツ
- 一 尼崎幸右衛門が女親の仇を撃つ事アノカサキ アメノオヤノオヤノヲウツ
- 一 伊丹康勝拾言の事イタノヤスカツカクゲン
- 一 佐藤直方直言の事サトウナホカタチヨウゲン



廿五目次

常山紀談卷之二十五

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○青山因幡守宗俊の士は石井守右衛門政春といひ老あり因幡
 守大坂御城代は時守右衛門も從へり赤堀遊閑といひ醫者
 あり其從子源五右衛門を其子とて石井小右衛門有て
 頼りしうらうら心得しうらうらとて天満のかきうらうらとて寺に
 置り常より守右衛門がわらふ来り親しくとらうらうら小年経て
 赤堀鎗を弟子に教へりかきうらうらとてせし源五右衛門が鎗
 いしうらうら精練なるいしうらうら人小教へん事覚束なりと石井いひる
 を赤堀用ひざるのいしうらうらとて石井に立あらしむるといひ石井は
 きめふとていしうらうら老し身の立あらしむるも毎益よといふども赤

堀怒りく止らざればいざとて立合々も手もたなく石井勝
とりしは赤堀口をさし事よ思ひ延宝元年十月十八日の夜
宇右衛門がやう隠忍びく来りかかれ居てかけし鎧を盗
こせし宇右衛門が歸るを待く戸の内小入んとせしを突通
刀を抽く鎧をたくりくも十文字の横手小かく深
みく倒れ死し従者何者ぞとりしを一太刀斬く源五右衛門
逃去たり石井が嫡子三之丞八番有合次男彦七郎八
居しうがゆんとすも部屋を源五右衛門にけしは踏
破くゆきも源五右衛門行方とてなりぬ三之丞暇を
て彦七と共に青山の家を出源五右衛門行方を尋くも更
何方ありともしつるは源五右衛門が父遊閑も同意し

てやあし此者を討ハ源五右衛門隠居し同年の冬江
州大津中遊閑を切殺しそより京五條の橋伏見北京橋大
津の町に札を建重恩の人を殺し逃走りハ士の法は非故
大津中父遊閑を殺せり汝が為しも仇あるは逃めぐる人事を
止よ首を刎べ赤堀源五右衛門へ石井兄弟が姓名を尋り
りされも源五右衛門出ありハ所を尋めめくも見出
さば美濃室原村の犬飼瀬高信が妻ハ三之丞彦七がをあり
是を便しとて爰有し小彦七ハ犬飼が一族にむつりし
遂に我一人仇をうんとて室原村を知り延宝八年の冬
瀬兵衛の妻死し其翌年正月三之丞従者孫助を安藝へ使
よりし唯一人犬飼が家あり湯ありし源五右衛門

忍び来り其戸の側小隠し居く一刀小三之丞一深手を負せけ
り頃八天和元年正月廿八日の夜仕事もくくくくくくくくくく二の太刀
よ三之丞が刀持く右此腕を折落して三之丞伏せし脇差成
抜く左のも少く赤堀が股を突きこころゆく死しり座敷
犬飼が甥の茂七とりお老来居し赤堀飛かりく一太刀斬
くく犬飼が付く十文字の鎧をく赤堀は突てかゝる赤堀
くくある堀小よりくく刀をさげ後の堀を破らんとするを
犬飼見く鎧をとり直後小とせ透間より飛出て太刀
か眉間を切る犬飼年老くくくく倒しりく赤堀を
討めくをり一族相集り松明を燈し追かれども行方を知べ
犬飼ハ赤堀が大坂より宇右を圍おりく時十文字の鎧

よて突殺せりハ其鎧より突殺さんとせひくれども所狭く
てものよきえられ討めくせりと悔くくくくくくくくくく
日帰くく此をす齒がみくく自害せんといひくくをさほくく
いひなごめり彦七も此由をす弥怒りわごるくく伊豫の親
類の方よりく海上より風よりいひ溺死しり赤堀ハく
尾張より伊勢の亀山板倉隠岐守の士青木安右忠ハ親類な
まば忍びくくくくくく頃く板倉より生くく禄百五十石あるく
赤堀を移くく老あくく其用心甚厳なり他國より来る老ハ
一夜の宿をく禁制し見あくく者をも城門の内より入る赤
堀名を改めく水之助と称す宇右忠が三男源藏友時四男半
藏吉政として兩人皆幼少よて安藝の松平安藝守の士田中左近

右赤門石井九大夫迎へとり丹羽三大夫が許して赤堀育以三大夫が
妻ハ石井家より嫁せしなり我男の身ありバ赤堀をさがし出
首を刎此鬱胸をもちてさす女は身年老く志を遂げず年
の怨をなげざよと日夜ふかたり聞きくバ二人遊び戯るふ心なく
ひさすは仇を討べき志一筋なり従者孫助ハ石井家の恩を
請し身なまじバ赤堀亀守ありとさすさほぐは身をやつし魚
を賣り或ハ後とさすことたりとく龜守は初めさすども宿とるべき
やうあく城守に入ぐとくまじバ時く墮降したるまじくを人あ
きく赤堀が用心弥厳あり天和二年源流龜山の有様を傳へ
笑我既よ十五よ及べり龜守は初め父の仇を報ゆべりいづらふ

遠方よるく月日を還さん事の口をききとて一族さすく
わし止まども聞入む志のびく廣嶋を去る時どやう龜山の士
いづらうあらん殿の仰あく赤堀は心を合さる天運つよく
父の仇ハ討つらうもいづらのがれ得ん萬死の中よ一生もあは身
なまじバ幼少あり育ちまじり伯母ハ母は恩よりと深く人不知せ
まじり最後の盃せむやく物語の序ふ近比身も壮なり
酒も嗜むていづらども思ひ立志ある身ハ少しとのまんまゆ
々不幸ふ外より来まじり酒少したまらんやといへを盃をいづら
おいづらて覚え涙の落るるをわさる袂よかくて遺書
をば婢女に授ける盃舟は身なく備前岡山より田上某うわらふ
まじり居く天和三年大坂に赴く年八十歳なりいづら度信

は有るりかゝく源藏をまきより旅人の体をしく亀山より又
京に歸るゝ或ハ関坂の下に赴き二年の間亀山に入らざり
謀をせしむるも中々思ひもよらざりし江戸に赴き
隠岐守の屋敷に下り奉公せんとすれども此も屋敷の法厳し
く力及ばず又亀山より又常州上総下総にても其便を求め
奔走し其艱難極まりし初もたうるべしとてかくく廣鴻を
ゆく七年るゝぬ始ハ甚行路よりあやむるゝ天の護り有
らん程程く後ハ寒暑をも能堪へ雨露より濡き風氣も
冒さるゝも菜をも服せ其身愈健たり或ハ好山に打伏
或ハ飢渴し及べども志しき一事ハ膽を大しちりもひ
まの守は松ハ今もそと成長しとて一族の止るも顧げえ禄

元年廣鴻を出く兄と一所たり亀山に入ん謀をあらかくて
板倉隠岐守卒去有るゝ江戸の屋敷より取らんも立せ
んとく半藏江戸に赴き日傭となり屋敷の時々行くれども
其便を得ず

従者孫助八年老病重なり一が藝州にゆけといへども何
の面目有てら仇を討得ずく廣鴻ふ帰るべきといふ孫
汝辛苦も病付りいさぐ敵討べき時のぬぬや斯や
で心を盡せども其甲斐たれそ口をくられされ親族
しらの見つぎ終りも一日の飯料米一升より價はすれ
僅一日四合のやあはるべき日々をせり口は食肌をお
かんとせしむるはいつあや及ぶ草履の價も其半より

こゝで出せ又もよりを求るも費をたしあふむかゝる艱難の
ありしをぬもこゝちやうに安藝の一族より聞せしむかきく
いふに後うらまはバ度嶋へ行ぬ下終の身とくく年久しく
命をばかたより輕くしつゝをひひ志をいふ
くろが終る病重くく元禄十年廣嶋まで死し
源藏江戸よ赴きく半藏が心だてて心を合せ又上方より
兄弟往還謀り織が如し或時ハ僅の商となり又或ハ近江の茶
うりとなり或ハ伊賀の山家老とつたり討つひのふる
まひそまふ似習しんところらげり元禄九年
半藏板倉の士平井才右衛門がりふ下終となり奉公する
便を得く龜山よ平井帰るれば半藏も供し龜山よ入ル

事を得し源藏ハ上方よ赴き伊勢より通ひく人目を忍び
半藏よそく仇の有様を傳へ平井病と死し平井と赤堀と
親しむまじバ其弟ひよ来る道よ討んとたりふいふ
有るん赤堀来く其手ごとくも空しく成ぬ其明の志をば
暇をやりしげ又龜山の辻四郎兵衛りふ奉公は江戸
おひひく半藏江戸よ供せんハ志よあふむといへども龜山居
んよハ所の人請人よ頼むべき人あふまじバ辻が供し又江戸
小赴く源藏目を病く久し療す日目を忍せしうらふ半藏
江戸より又龜山よ帰り忍びて仇をうらむべし便を得
ぶ半藏又江戸よ赴きしハ源藏も又江戸よ行く町奉行川
口振津守のりふふより仇うつべき願の事をば是元禄

十年十月十六日たり申候ハ何とて来りてやと問ふ
弟ハ所志ハ正と立をばり申候煩ひ知れ音を以て仇
討んと志しハ八年久しく成ぬいふ今テハ申候事と問
ふ小源茂盛とて兄弟とも幼少して敵の有家を存せし近
頃兼り知りて事ゆゑに又兼り出候事と問ふ
申候人ハ外へ泄聞えく仇の跡かきまはらん事を恐れく
の事ゆゑといへバ尤なりとて帳と記しとて攝津守岡届
らまぬ江戸 御城の下馬れりも見付しバ付とて
と許さるる一層由一禮しとて又松前伊豆守の許に至りて
とて攝津守よりいひ送らるる帳と記しとて首尾よ
く仇討まはると色代とて源藏ハ龜山ニ歸り奉公せ

んと便りを求めまじもきとて金銀を借しバ賄賂を
他國より来る人の奉公まじき請ふべき人ハはひもあは
況や一金の貯へあはれば源藏もいんとてまじきやとて元禄
十二年源藏又江戸ニ赴きて周防守のりて小夏目ハ
兵衛といふ者ありりて上総の人たり下部を召置んとせり
つば中務とてよりりりて夏目小告とて駿河の者とていふ伊勢
の太神宮よりありりて志あり給金ハ給はれども奉公せんと
たむくりとて夏目とて源藏を下給りてりり
半藏此時ハ下村一宇といふ者も奉公し兄弟共ニ龜山ニ赴く
是より兄弟日夜よかまじ忍びて心を合せ仇を伺ひりり
其後小石黒仁右衛門下給り至りて実儀ありとて源藏は心

まめやうをみるを見く甚心安り一請人を頼む事よ
くたうぬかゞゞ鈴木柴右衛門とて老よなまゝ一それ夏目
此人、勝まゝる老くと詞をさへし半蔵も下村は仕ふる事
ありくたうぬかゞゞ主人いさゝる事大方あゞ其父は禄増れ
一は半蔵を若黨あゝて刀小衣服を添て与へし兄弟今
ハ亀山ありく時を待たぬ赤堀が當番の帰路を討べし
定めく元禄十四年五月もぬぬ八日ハ赤堀が番あゝバ午の刻
小代アゝゝ歸るを討んとせし不さく歸アゝゝ志をなす
してアゝゝバ其明る朝の帰路をとく各用意しし源蔵ハ殊に
下殺のよぶ事多く更小い事多し一宵少の間暇を乞得と
町に出るより龜山の八幡宮八道のやうあゝバ立寄る心

あづるに急邊を著神前に向ひ今日必父の仇うせんと
と宮を知らば夜ハ明しりしバ二の丸小行空眠のしし半
藏を待居しり半蔵ハ出んとせし時主人は用ありくおとく
成るゝ如小友達の来り多しバ着込る間もあゝ主くより
ひしる刀ハかけをかくしをさる刀をとり飛出く二の丸はけバ
兄ハ半藏をまゝと待居しる来り多しバくゝ中よ男
たりかくて赤堀其日ハ唯一入廣間より出く歸アゝゝ兄弟お
つまゝく二の丸此外あゝ石坂門を打過る時赤堀が後よりかけ
ぬけく前よ立あさぐり石井宇右衛門が子源藏半蔵ありと詞
をうけ源蔵抜うち赤堀が眉間を切赤堀我刀の柄を請とめ
しつゝも二の太刀さるさる切付しつゝも半蔵かけ来り赤堀が

頭カシラふりくくと切キレ付ケたあきく處トコロをききみつけき切キレらるゝハ立タテ
もあがごぞ死シらるゝ源ゲン孫ムネ乗ノリかり刺サシ貫スてらめをちり
従ツグ者モノをバ追オヒらるゝひつ兄弟ケイテイハ初ハジメ赤アカ堀ホリが父チチを打ウチらるゝ仇ウラナヒを
報ウラナヒゆ次ジ弟テイ志シらるゝ置オキらるゝを常ツネ小コ各オノオノ一イツ通ツウ帯タイの中ナカへ入イらるゝ
取トリ出デし赤アカ堀ホリが袴ハカマふらるゝみり所トコロハ長チヤウ臣シ板イタ倉クラ左サ右ウデ並ナリが宅タクの
あらりたり我ワレもくんと馳ハセあつまらるゝ年トシ頃ゴロ日ヒ頃ゴロ思シひ答コタせ
赤アカ堀ホリをバ討ウチとめらるゝ今イマハ世セふ心ココロよかき事コトあり刀カタナの目メ釘クギので
うんと切キレあひく尸カネの山ヤマをたう年トシ久ヒサく赤アカ堀ホリを警ケイ固コせられ
恨ウラミをもちさんと兄弟ケイテイのひらり追オヒらるゝ人ヒトを待マテとも更サ来キる人ヒト
あ一半イツパン孫ムネ其ソノ時トキ爰ココあき切キレ死シせんあり城シヤウ外ガイより追オヒらるゝ
死シ狂キヤウせんさうバ京キヤウ都トももつえ旅リヨ人ジンの往ワウ来ライ小コ関カンをて安ア藝キの

一族イツクとちゆも兄弟ケイテイ本ホンを遂トシ一イツ事コトを多オホまきなれば城シヤウ門モンをバ
うりく道ミチまんといひ早く半ハチ藏ザウ先サキあきかけゆを源ゲン藏ザウ
うらうらうら細コホシをうけ汝ナホが用ヨウの事コト急イソクぐと主人シユジンのいひまらるゝぞと
くいそがれよといひく打ウチ連レンく城シヤウ門モンをききバ番バン人ニンもつ答コタめだ黒クロ
門モンをのがまゆく京キヤウ口コよりお山の西ニシはんこの茶チャ屋ヤをききられども
追オヒ来キる人ヒトなまればバさてハ道ミチを得エ人ヒト事コトも難ナカうじされども馬ウマを
追オヒ来キらるゝ兄弟ケイテイまき息イハ切キレらるゝハ思オモひも切キレ合アヒまらるゝと
静シヅカ小コ関カン川カハをらるゝ山ヤマより登ノボり見ミらせども追オヒ来キる人ヒトなまれば
急キヤウ山ヤマの西南サイナン一イツ里リ半ハチをらるゝ行キく小コ家カより立タり草ワラ鞋ハキを買カひあ
津ツ比ヒ城シロよりく者モノなりとく道ミチを問トひらるゝハを案ア内ナ者モノあて
十ジュウ町チヨウ余ヨリもるゝ椽スギ本ホンの松マツ原ハラをらるゝバ童ワスレをわへ又ミナ道ミチを

きざぐへく北あふりふかろく食物をまゝめくゆく小川を
渡りくバロ嗽く太神宮小向ひく幼少よりちひ入るる仇を撃
つる事の添さよ廣嶋をせりよりたふらふべしハめく存水
りくふく小爰までのがまじやるるハ神の護と伏拜く伊賀の上
野小出をまじより山城に設置の道を向伏見よ趣き京より諸
國の一族れりふ龜山ゆく仇あしよりまじよりひねり
岐曾路より江戸よ趣き五月廿六日町奉行保田越前守のり
より後く仇討く由をせバ尋問く事ども有く越前守自
出く兄弟よ始終詳よ字より事大くあるべ饗膳
終りくそまじより松前伊豆守のりふ至りく過中并を
くく入くゆく悦びあへり青山に藝州に屋敷を往て石井清

大夫がゆりふあり青山下野守の嫡子筑後守此由をす即使を以
て兄弟と引くれり其後下野守に領地其比濱松あり
くば遠州より兄弟ともふ罷せられ源藏後重に職を命
ぜられり

○讚州九龜京極備中守高豊の弓足輕尼崎幸右衛門とよ者
あり同弓足輕岩淵傳内とよ者幸右衛門が妻よ心をけ
幸右衛門があふりけり時さほくといひくふ中く受ひく
くきまもあふり恥くめく又或夜来アふ肯ハ
有くふ幸右衛門外より歸アく此よを見傳内毎礼
者と怒りくば叶をどとちひ刀をぬきく幸右衛門を
刃切く逃る女房ハ小女をいささ居りがそふ棄く夫の脇

差をぬいく傳内が逃るを追うけしうとも逃のび一六脇差
を投つけしうし傳内が右の肩小少一疵付ぬ冬の末夜よ
く雪ハふりぬ終は行方を知らず女房立降り見まは幸右妻
深手少く死ししうしうばなき悲しむる大くなすむ
傳内ハ重罪の老とく尋れしうも行へをさしは幸右妻
妻ハ妹の夫ある関根え右妻といふ老のくふ月日をわかれり
只朝夕夫の最後は有様口をく思ひつ歎きのあすりふ
病づも翌年二月は死ししう三歳よありける女ハとむの
育おく十三歳ふなりし名をアヤといふえ右妻夫婦と実の
父母なりといひ居るは或時こややくに父母の事ども語ア
せ汝が母ハ我為姉あるがせえく此子が男なりせば仇を

討つ事も有べきし口をくやと明れなきく空しくなりぬ
と語アくもふアヤ大に敬馬き今まで愛おしむる事どもと
弟いしよりよりかぬし人となりぬ本の本の天おきのいひく
さめくとなしより外の事なりして十六歳ふなりける時西人
よ向い江戸よ参りし奉公仕らん父母のこめ諸國の観音小
も参詣せむやと存る萬一ツも仇うつべきあはれも神
佛よ祈らむやといふ兩人しらく止まらぬ中くともべきふ
あしこれバ京極家の侍村瀬藤馬といふが江戸よ赴くふたの
てはしをくをいしやハ江戸よ赴き番町の永井源次といふ
御旗本のりし奉公よ知る源次ハ剣術の弟子あつて目毎よ
来りアヤが勤る有様殊外心をつけ奉公さく誠よ除く

多ひいゝある老の子やと尋らるゝ小アヤ詳し事の子細を語り
父の仇を報いやすん志よゆり涙を流し答へられバ源女はく
とやうく女なりともなむ父の仇を討つべきまが我剣術の第
子とあましく教へ試す小才氣有く思ひ入る志あまバ剣
術もわざとなく進みたり夫婦弥いそりむせり二年も及て
主人のハ爰おのゝ居らんより主人をお手こ取換て仇を
報よりとさほぐふ心を附りりバそまよりこりこ
奉公せし既小十二年を過る主人七十人も及ぶ其後本庄
ある坂部安兵衛といひ御旗本の家よなまきり小泉女
内とく五十餘ある男は有るが平生酒のこもく壮年此
事とも何くもして後り出り大言せしが若氣もく人の女房よ心

をうけり事小より其夫を切く棄てり昨日のやうふ思
ども早く月日も過りたるよと物給せしをアヤやめていゝ様も
候し事もあるよとせひきりしに聞届ん物をとんの申し思
ひくそれ嘘あるべしといふバいゝを偽をいふべき今まで人よ
いひつる事ハなれども年月はるつ國ハ隔る委まき事いゝ治
るべし我ハ元讚別丸おゆる京極家の老ありとて有つ。次
をいひく幸右衛門よ子有つるが女なりとも覚えればおそく
事もなるとく肌をぬげバアヤが母の授つけりいゝとせし
脇差の痕もアヤハ口今爰おと討ちんと立あがると
せしがゆり討ちとあひいゝバいゝとせしとせし何と
たゞく其望を立其明の日永井れぬふゆとくかしくと悟り

々々バ源公大に悦びく則下を打連く京極家の村瀬が方
は仍告志せしむるまきバ則備中守に申く 公は許へし
坂部のゆふ 公より乳ころくは弥紛う事なうりなれば文内を
京極家よりしつらぬまの文内を獄に入置鳥越の下屋敷
は虎落をゆひ日を定め文内を獄より出して勝負此場小出の
まうり 村瀬やを連来りぬ肌は鎖の着込を忌白ちりめん
の鉢巻して一尺あまりの小脇指は二尺三寸の刀さし虎落の中
よ入村瀬やを不用せしむり其時やいふ文内はさるる小出
しつら 尼崎幸右衛門が女ある今更出合し事天道の冥加
と詞をかくまきバ文内おのまふ語をたとされてあつた事をあし
しむるは毎念あまきても此刀を父を子と手はかかんとして三尺

むりの刀を抽く切合るが様小拂ふ刀はあづを切き二の太刀
面よあしつらひむねをアヤアヤとぬぐ乳の下で切まげけし
て静小首を切二十餘年の間志しつら仇只今討く父母よま向
はと儉使よいひしつらを感せざる者なり備中守も悦びく俵
采かろき子の娘あまきても孝行氣をげさバくらの士あもいぞら
劣らんとそ息女に付らまきつらと我

此物諸讚州よゆく人ありく問はしふ更は虚ありは尼崎が
居しつらしつらハ丸丸の風袋町といひし處とぞ

○伊丹播磨守康勝ハ寛永年中御勘定頭三人を召まじり其弟
一は撰むる農をつとめ商を通し民と俱に利を回くしつら
まき高し其比商人の運上金を 公儀よさしげなり甲斐國より

物を糸糸を一人してあきあき老ありたるをば、小又富る商人あ
りて、肉々告て今中ぞの人仕なる處の金は一千兩ありて運上致
奉ふべし某一人小糸高ふ事をゆへ、後よびよを申して此事を
然るべしと議定ありし、小播磨守一人を心得とて聞入を執政
の大將とちあも此由を告て乞ふ事止む三年の後執政は人々播磨
守よきくくの事請ふ老あり、同職の人ゆへ、とといへども獨用
ひらまぬときく、誠もや天下は富を以てく、是の時六千兩の金、少
きといへども是を以て國用を足す、小資なりといへ、いふがうに
いふとありし、小播磨守兼り今より盜賊のなるとぬ、さういふ
ひらまぬは、いふあも、や、とと答ふ、く、いふある子細ごと問
ふに、播磨守日本のゆへ、と、いふ、ま、と、いふ、と、いふ、紙あて、中、

おも、糸糸と、中、の、ハ、貴賤、一回、小、一日も、た、く、と、叶、い、ぬ、抱、か、て、
其、價、の、後、一、く、ま、び、こ、と、せ、れ、と、す、け、と、ハ、な、り、ぬ、さ、し、は、あ、者
今、ま、で、高、人、の、奉、ア、し、よ、り、千、兩、の、金、を、ま、し、る、事、此、千、兩、ハ
い、づ、こ、り、ぬ、い、べ、き、此、紙、を、高、く、は、價、を、増、て、あ、た、る、ふ、を、又、と、
を、買、く、ら、し、ま、た、ふ、人、い、く、も、い、え、ん、よ、こ、れ、ら、も、同、ト、利、を、得、
高、ま、ん、と、せん、よ、ハ、こ、ろ、小、加、を、り、か、こ、ろ、は、増、く、後、ハ、價、を、ま、さ、く、な
ア、る、ん、凡、一、帖、の、紙、價、一、二、錢、を、ま、し、る、ん、ハ、富、る、人、の、憂、と、す、
よ、ハ、足、ぶ、ど、貧、賤、の、人、一、日、も、得、る、所、の、利、誠、も、さ、う、か、り、僅、一、二、錢、
を、累、ね、て、妻、子、を、も、つ、か、か、く、あ、さ、や、う、た、老、と、も、今、日、中、で、ハ
と、れ、糸、や、の、物、を、常、に、用、ひ、ま、ま、り、價、忽、と、ま、り、と、れ、む、と、て
更、何、物、を、以、て、り、此、は、換、べ、き、然、る、バ、是、ら、も、又、何、の、ま、し、く、が、あ、れ

なふ抑もそのあまき其價をまゝして其得る所の利を以てて
帑を買より外の事ゆへに凡一物の價増を耐を万物の價同
しく考へてある事定まるるゆへなり價貴くたうふるを
んとし得ずれば或ハ飢或ハ寒ゆへも及ぶ一飢寒せしめ
む必死す死すれども守るを失ひはらぬハ士より上つるは
事よこそ人下は人の人ハ死して寒を死を盗してと死
死ハ一死なり同しく死する命いふも一日と世ふあし
しく思ふ賤しきがたうひありさてこそ盜賊ハ起る事
その人おれハ只農と高との事れやうふれども士の召仕ふ奴婢ホ
も物の價貴くく求得むハ盗むも同かく盜の世ハ盛ん成
かん財小至りくハいある政事をもてまじきとて先づりんや

この盗ハ貧より起る事やてんそまよりの又民ふゆる
利を争ハし其利上ハ得るやう心志のせんハ天下其風
靡き従ひくよた人々共利を争ひ各其欲する所を得んと思
んこまらハ盗を盗人あて其禍盜をまよりの増してこそ人
天下をたもてせまへバ天下の寶こそく御寶たう且上の費を
はる省せむひるんハ一年の中つて下の御寶幾か万兩の事は
てらふべきもそまよる僅ちあけ金をまよるとく盜賊起て世の風
そらうはなれん事身の肉を切く飢を救ふは腹は満る時身終る
とりくも同くはる大畧物の價はまよるなりゆへハ國郡
は運工の多たが致も處たり某既ハ年老ぬ頻く死しやべし
相構へくこの後もかゝる事やとて老けりくも人々よくくくらる

多しといひをばんく感^カりたりと云ふなり

○佐藤五郎左衛門直方ハ学問^{ガクモン}よて世^ヨ々々たり酒井忠清客^{サカキタツキヨシ}の

りてなりと禮^{レイ}せられて終^{ツバ}りたり井伊掃部頭^{ヰイカモンノカミ}のりふまひりて

いふ掃部頭^{カモン}の前^{マヘ}よゆびり中^{ナカ}長^{ナガシ}臣^{シン}と物^{モノ}成^{ナリ}せし時^{トキ}直方^{ナカカタ}が云^{イハ}大事^{ダイジ}

ハ論^{ロン}あるも聊^{レハ}のりも傳授^{デンジュ}たゞひと中^{ナカ}半^{ハン}のりそ師^シよ秘^ヒく学^{ガク}び

秘^ヒ言^{ゴン}古^コも忠^{チウ}慮^{リョ}をりも後^{ノチ}こそ得^ツよりのありふ日本^{ニッポン}の人^{ヒト}

大事^{ダイジ}のりそに学^{ガク}ぶといふなり傳授^{デンジュ}秘^ヒ言^{ゴン}古^コといふ事^{コト}をたゞ

自己^{ジゴ}に料^{リョウ}簡^{ケン}ゆく事^{コト}を蹴^スぬるあり各^{オノオノ}々^々ハ存^{ゾン}んやと

向^{ムク}ふ皆^{みな}いふと向^{ムク}々^々とされバ國家^{コクカ}の政^{セイ}も萬^{マン}民^{ミン}の命^{メイ}は

一^{イチ}言^{ゴン}で國^{クニ}の安^{アン}危^キも至^シ極^{ゴク}の大事^{ダイジ}ゆゑ聖^{セイ}人^{ジン}の言^{ゴン}へた

ら萬^{マン}世^{セイ}の鏡^{カミ}ありといふも今^{イマ}の大名^{ダイメイ}若^{ニギ}長^{ナガ}もこゝろに

只^{ただ}自己^{ジゴ}の思^シ慮^{リョ}ゆく思^シふまに政^{セイ}をたゞ危^キき事^{コト}の至^シ極^{ゴク}あり

と語^{カク}アたり直^{チキ}方^{カタ}が論^{ロン}まゝに格^{カク}言^{ゴン}といふなり予^ヨ筆^{ペン}を

らむハ事^{コト}なるやあはれ後の^{ノチ}此^{コノ}書^{シヨ}を讀^{ヨミ}む人^{ヒト}こゝろを察^{サツ}せられ

よしなり

備前 湯淺新兵衛元禎 編輯

同藩

平野太郎左衛門敬邁
赤木益吉周憲

校訂

常山紀談跋

湯常山先生錄勝國以來事蹟爲紀談若干卷蓋先生之意謂文武之道一已出將入相古之君子皆爾岐而二之者後世之爲也夾谷之會仲尼奪萊蕪之膽於立談之間魯郊之戰再求折齊人之衝於用矛之末其它禹湯文武之誓周禮大司馬之巫職可以徵也夫一治一亂天之數也不通文武者非全材也白面書生不知軍旅

拱手讓諸武人俗士寔可憫也兵家者流
生長太平之世目不見兵革耳不聞金鼓
朔々然徒欲以空言取信於一世亦可憫
也故當今欲講軍旅以備不虞者每若熟
知戰國事情熟知戰國事情而後甲兵可
試也軍旅可明也先生之有紀談蓋爲之
也先生學綜古今抱文武之大略在治則
臯陶伊傅在亂則管樂張葛何所不可爲
乎哉雖然時命難遭屢起屢躓終不能用

牛刀於一時抑又堂々之陳正々之旗風
雨雲雷交發而竝至龍蛇虎豹變幻而出
沒者人不及見之也則我獨憾先生之志
大而不能敢用矣耳一生精力半在茲書
先生嘗云

明和庚寅冬

赤穗

赤松勲謹啟

BOOK 11

發行

書肆

江戸日本橋通二丁目	同 浅草茅町二丁目	同 日本橋通二丁目	同 今	同 芝神明前	同 本石町十軒店	同 下谷車改町	京寺町通松原	備 中倉敷	大塚齋橋通安堂寺町
須原屋茂兵衛	須原屋伊八	山城屋佐兵衛	小林新兵衛	岡田屋嘉七	英大助	和泉屋庄治郎	勝村治右門	太田屋六藏	秋田屋太右衛門

